事例に学ぶ 防災・環境教育 —23—

主体的学びへ 脱「調べさせ学習」、指導観の改革を

手島 利夫
ESD・SDGs推進研究室室長

環境問題だけに限らず、社会の課題や世界の課題を自分ごととして捉え、本気で解決したいと願い、そのために強い問題意識を持って調べ、考え、悩みつつも判断し、協働する子どもたちを育てていきたい。そのためには主体的・対話的で深い学びづくりを支援し、方向付けていくのが教師の重要な役割である。

しかし、研修会等で出会う何千人もの教師の方々から聞く限り、ほとんどの教員は「自分には主体的に学んだ経験がない。知識や理解のための勉強や点数のための勉強しかしてこなかった」と言う。

ある大学で「ESD教育法」の講義を担当したことがある。授業後のアンケートで、教育学部の学生たちから次のような回答が多かった。

「よく『子どもの思いや願いに応じて』という言葉を耳にするが、それは指導上の建前で、実際には教員のやりたいことを押し付けられているなと感じてきた。私が小学生の時に受けたエコに関する授業も先生から与えられた課題をこなすことが目的になっていて、エコに対する考えが大して深まっていたわけではなかった」

このアンケートに答えた180人の学生のうち、小学校から大学3年生になるまでに主体的な学びをしたことがあると答えたのは2・2%（4人）で、89%（161人）は主体的に学んだ経験はなかったと答えたのである。

現行の学習指導要領で主体的・対話的で深い学びを求めるのであれば、「授業の改善」程度でなく「指導観の改革」から始めなくてはならないだろう。

従来の指導の中でも、主体的な学びを意識した「調べ学習」という手法が広く取り組まれてきた。しかし、教師が与えた課題に応じて調べさせ、まとめさせ、発表までさせる「調べさせ学習」に終始していたのではないだろうか。

その結果、知識はあるが「ひとごと」であり、「勉強」はしても、自らの行動を変容させる「深い学び」をしたことのない子どもばかりが育てられたのである。

児童・生徒を問題の本質と出合わせ、魂を揺さぶり、驚きを持って感想や思いを共有したり、創りたい未来の姿やありたい自分たちの姿を描かせたりするところから、子どもの学ぶ心に火を付け、主体的な学びを大展開させたいものである。

（終わり）

著作権は日本教育新聞社に帰属し、記事、画像等の無断転載はできません。